

## 編集後記

今年度は新型コロナウイルスに翻弄された1年でしたが、このたび、地域研究センター紀要『地域イノベーション』第13号を無事に発行できたこと、ひとまず安堵しています。

安堵した理由の一つは、この状況下で投稿論文が集まるのであろうか、という懸念があったからでした。投稿論文の募集が始まったのは2020年7月初旬、その頃大学ではオンライン授業がようやく軌道に乗ってきたものの、多くの研究者や学生は目の前の授業の準備や生活に精一杯であり、とても論文を投稿する余裕はない、と考えていた人もいたでしょう。

他方、法政大学地域研究センターが団体会員として加盟している地域活性学会の毎年9月開催の研究大会もオンラインでの開催となりました。私も実行委員の一員として多くの会議に参加しましたが、発表者はどのくらい集まるのか、また多くの発表者が大会終了後に投稿する研究論文集にはどのくらい論文が集まるのか、我々の紀要と同じような心配がありました。

しかし、当初の懸念は杞憂に終わりました。例年通りの投稿論文が集まり無事に紀要と研究論文集も発行されました。両方の結果に共通していたのは、紀要や研究論文集に関わる多くの研究者が「学生らの研究発表の場を無くしてはいけない」という使命感や思いでした。こうしたことは目に見えないものですが、論文の投稿者にも伝わったのではないかと考えています。

また、今回紀要は例年通りに紙媒体で発行することにしました。授業のオンライン化や電子データベースが進歩していく中、我々の会議でも「もう紙での発行は必要ないのではないか」という意見がありました。保存のスペースや予算の関係もあり、一時は紙での発行を停止するという考えもありました。実際、先に紹介した地域活性学会の研究論文集は原則PDF化しHP上に掲載されています。

しかしながら、学生への論文指導の時、すぐに取り出せて見せることができる紙媒体の便利さを改めて感じました。このような点から、もう少しこの波にあらがって、紙媒体での紀要の発行を続けていきたいと考えています。

編集委員 松本 敦則